

2026年5月31日 説教「その日にいのちを保つ者」

ルカの福音書 17 章 31～37 節

ルカの福音書の学びに戻ります。前段においては、「人の子の日」、再臨の日について学びました。人々の言葉に左右されないこと、再臨の主の到来の様子、とはいえ人の子イエスは地上で受難を経なければならないことが語られました。そして、「人の子の日」は、ノアの出来事、ロトの出来事のように、やって来ることも教えられたのでした。

1. 屋上や畑にいる者は (31～32 節)

- ①その日、屋上にいる者 (31) **「その日には、屋上にいる者は、家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。」**

「その日」とは 30 節に、「人の子の現れる日」とあるように、再臨のことです。しかし、前もってイエスは地上において「多くの苦しみにあい、時代に捨てられる」(25 節)とあります。すなわち、まずは十字架に上られることは伝えておられました。そのことを踏まえた上で、主は再臨について語っておられるのです。その日、屋上にいる者は、家財などをとりに戻ってはならないと言われます。下にいる家族もいるかもしれないなどと考えることは無用、ともかく、下に降りてはならないと言われるのです。

- ②畑にいる者 (31) **「同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。」**

また、主の再臨の時に、畑にいたとして、その人も「家に帰ってはいけません」とイエスは言われるのです。つまりは、この世における大切な財産もその時には意味がなく、家や家族への情より前に、自分と神との関係が問われるのです。また、「その日」は、その人が家に帰ったとして、自らが何かなしうような「日」ではなく、一人一人が神の前にその信仰を問われる時なのだということを教えられているのです。

- ③ロトの妻を (32) **「ロトの妻を思いだしなさい。」**

神に向き合うべき例としてロトの妻のことがあげられます。ロトの時代については、28 節から 29 節でとり上げられました。創世記 19 章にある出来事です。神はアブラハムにもソドムとゴモラの地のさばきについては言及されていました。しかし、ついにその時が来てしまいました。ロト夫妻と娘たちにはひたすらに逃げることを示されました。その時に大事なことは振り返らないことでした。その地は硫黄の日が降らされて滅ぼされました。そして、ロトの妻は振り返ってしまったので、塩の柱となってしまったのです。この事を思い出して、その日に備えるべきことを主イエスは教えられたのでした。

2. 二人のうちの一人が (33～34 節)

- ①自分のいのちを救おうと努める者 (33 節前半) **「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、」**

このお言葉については、9:24 で教えられたことでした。それは 23 節の「自分の十字架を負って、ついて来なさい」に続く部分で、「自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い」とあり、内容はほぼ同じです。ただ、9 章ではそれに続き、「人は、たとい全世界を手にいれても、自分自身を失い、

損じたら、何の得がありましょうか」と続きます。それは、この周辺の御言葉の解釈のヒントとなります。

- ②自分のいのちを失う者(33節後半)「**それを失う者はいのちを保ちます。**」
「自分のいのちを失う者はいのちを保つ」とありますが、9:23 では「わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救う」とあります。ここでの「いのち」の原語はプシュケーです。永遠の命を表す言葉はゾーウェーですから、ここでは広い意味での「いのち」を表しています。つまり、肉体の命、人間存在の根源と言った意味です。ここでは、永遠の命につながっていく「いのち」という様相があります。

- ③同じ寝台の二人(34)「**あなたに言うが、その夜、同じ寝台でふたりの人が寝ていると、一人は取られ、他の一人は残されます。**」

寝台に寝ている二人とは、必ずしも夫婦のことではなく、二人という所に強調があります。二人寝ているうちの一人が、再臨の日に、一人が取られ、一人が残るという厳粛な出来事になるということです。これは、人間の側がさばきの言葉を述べるべきではなく、そのような峻厳なる御手が伸ばされるのが終わりの時なのです。

3. はげたかが集まる(35～37節)

- ①白をひいている二人(35)「**女がふたりいっしょに白をひいていると、一人は取られ、他の一人は残されます。**」

34節に続いて、二人が登場します。二人の女性です。彼らは白をひいているということです。白は長方形の石の中央に窪みがあって石板でひく物、円形の二枚の石を組み合わせてひく物があります。穀物や香料などは白を用いてひかれました。ここでも二人のうち一人が取られ、一人は残されるという、その日の現実が語られました。＊なお、異本に36節として「二人の男が畑にいと、一人は取られ、他の一人は残される」があります。

- ②弟子達の質問(37)「**弟子たちは答えて言った。『主よ。どこですか。』**」

イエスは23節で「こちらだ、あちらだとか人々が言っても行ってはなりません。追いかけてはなりません。」とされていますが、ここで弟子達は、それはどこでの話なのでしょうかと質問しています。一つには、そのようなことは起りそうもないという疑問があるでしょう。さらに、そのようなことがあるとすると、どこで起きるとかといった興味があるでしょう。そして、そんな恐ろしいことがあるとするなら、どうすれば良いのかという面もあったでしょう。

- ③死体のある所(37)「**主は言われた。『死体のある所、そこに、はげたかも集まります。』**」

イエスは弟子達の質問に敢えてお答えになります。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります」。ノアの時代に悪が増大し、人々は悪いことばかりもくろんでいました。ロトが住んでいたソドムやゴモラも悪に染まっていました。そこにさばきがくだされたわけです。それと同じように、どこまでも神を神とせず、神に反抗して罪を重ねていくならば、どこであっても、はげたかという言葉で表される審判が行われることになるかと教えられたのです。

《展開と結論》

何か重要な物を失ってしまった、という時に私達はショックを受けます。そしてなんととっても、親しい人を失うという事があれば、その衝撃は尋常なものではないでしょう。こうした喪失は、突然とやってくることも少なくありません。つい昨日までは、全くそれまでと変わらなかったのに、思ってもみないプロセスでそうした出来事になってしまったということはあります。それでは、今朝読んできている、聖書にあるメッセージをあなたはどのように受け止めるでしょうか。

その日、主の再臨の日は突然とやって来るのです。それについて、今朝の聖書箇所では次のようなことを心せよということです。①屋上にいる人は、家財があっても戻るな。②畑にいる者は家に帰るな。③ロトの妻を思い出せ。④同じ寝台にいた二人のうち、一人は取られ、他は残される。⑤二人が白をひいていた時に、一人は取られ、もう一人は残される。⑥死体のある所に、はげたかも集まる。

このような警告がイエスによってなされていますが、信者でも切迫感というものはあまり持たないことも多いと思われます。確かに、再臨について、パウロは「主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心をさわがせたりしないように。」(Ⅱテサロニケ2:2)とありますから、必要以上に心を騒がせてはならないのです。しかし、そのパウロは、「人々が、『平和だ。安全だ』と言っているそのようなときに、突然として滅びが彼らに襲いかかります。……ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎みふかくしていきましょう」(Ⅰテサロニケ5:3、6)とも伝えています。前兆はあるのですが、不信仰な人にはまるで突然とやって来たと思われるようにして、その時は来るのです。実際、現在の自然の動き、世界情勢は、世界宣教のことなどは、終わりの日が遠くないと思わせるようなことも少なくありません。

そんなことのなかで、終わりの日、再臨の日のことを見据えつつ、イエスが教えられる信仰姿勢があります。それは「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保つ」(33節)という御言葉にも表れています。自分のいのちを救おうと努める人というのは、その人の重視しているのが、この世の価値にあるということです。金、財、名誉、評判、快樂、この世的安定…。今日では、インターネットやスマートフォン、そしてAI(人口知能)などにはまることなどもそのうちでありましょう。要するに、自らの寄り頼むところが神以外のところにある場合は、「自分のいのちを救おうと努めている」ことになります。その結果は、再臨のことにも心を向けないことになってしまいます。逆に、見えない価値を求め、自らの十字架を負い、キリストに従う信仰によって歩いていくなれば、そういう人は「いのちを保つ」のです。ロトの妻は、後ろを振り向いてしまい、いのちを失う結果になってしまいました。私達も再臨の日に、後ろを向かないためにも日々、キリストへの信仰を確かにさせていただきましょう。